

イスラエル 考古学研究会

ニュースレター

No. 10

2010年10月

2009年度第5次

テル・レヘシュ発掘調査

小野塚拓造

テル・レヘシュの第5次調査は2009年7月31日から8月30日の日程で行われた。今シーズンの発掘調査は、スタッフ・調査協力者27名のほか、立教大学、天理大学、鎌倉女子大学、慶應義塾大学、上智大学、東京大学、筑波大学、国際基督教大学、東京農業大学、監理教神学大学、テル・アヴィヴ大学から参集した学生ボランティア、社会人ボランティア、キブツ・エンドルからの参加者、遺跡近郊のミスル村からの参加者にご活躍いただいた。参加者はのべ75名となり、昨年に引き続き大規模な調査となった。発掘調査が行われたのはテルに点在する7カ所である。この概報ではこの調査区を便宜的にA～G地区とし（図1）、時代およびテーマに沿って調査成果を概観したい。

前期青銅器時代（D地区）

これまでの調査で、テル・レヘシュの居住史が前期青銅器時代に遡ることが明らかになっていたが、同時代に属する明確な建築遺構は確認されていなかった。今年度の調査でD地区の一部を試掘したところ、前期青銅器時代Ⅲ期およびⅡ期に属する、重なり合った複数の石壁を検出することができた（図2）。試掘範囲が限られており、これらの遺構の性格はうかがい知ることができない。しかし、これらの石壁は同地区で発掘された後期青銅器時代の建築層の下へと広がっており、テル上段南斜面の東側は前期青銅器時代に居住域となっていたと考えられる。なお、今回の試掘は岩盤まで到達していないが、到達した最下層部からは前期青銅器時代Ⅰ期の土器が出土し始めていることから、さらに古い時期の遺構が存在している可能性は高いと考えられる。

「上の町」の周壁と城門（A地区、B地区）

（1）A地区

A地区では「上の町」へ出入りするための城門と考えられる遺構が出土している。しかし、この遺構

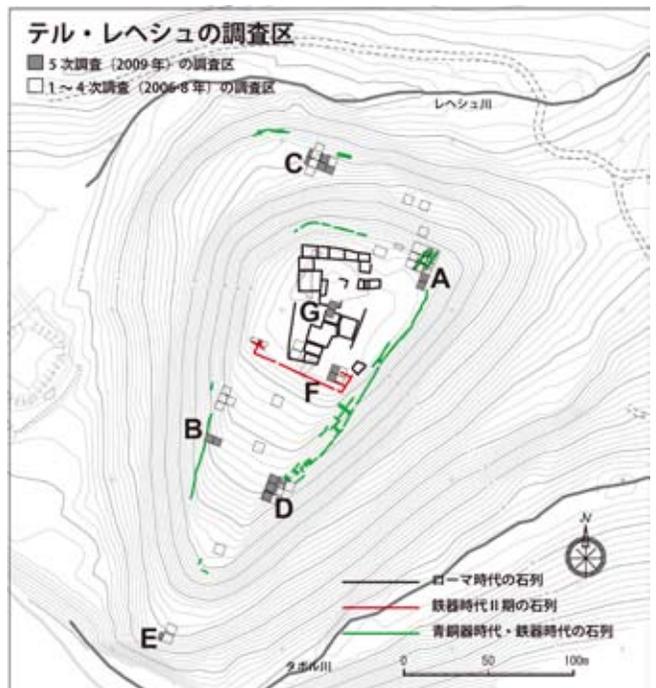




図2 前期青銅器時代Ⅱ期の遺構

が構築された時期と、テル上段をめぐる周壁との関係には不明な点が残っており、今年度の課題となっていた。そこで、城門遺構の南側に2つの調査区画を設けて、発掘調査を行った。まず鉄器時代Ⅱ期に属する遺構が検出され、それらを撤去して掘り下げると、幅0.8メートルの石壁と石敷きの床面が現れた(図3)。この遺構は昨年度に検出した鉄器時代Ⅰ期の建造物(城門遺構より上層に相当)の延長であると考えられる。しかし、出土した土器片は鉄器時代Ⅱ期のものが主であり、遺構の時期については慎重に検討する必要がある。いずれにしても、この



図3 A地区の鉄器時代遺構

遺構は城門遺構よりも後代に属す建築であり、城門遺構と周壁の検証は来期に持ち越された。一方で、城門遺構に沿って敷設された排水溝の傍らを試掘する作業が行われ、城門遺構が前期青銅器時代に堆積した土層の上に築かれていることが確認された(図4)。

(2) B地区

B地区の周辺ではテル上段をめぐる周壁とその内側に位置する遺構の一部が地表に露出しており、それらを解明するために発掘が行われた。調査の結果、テル上段の周壁は中期青銅器時代に造られたもので、少なくとも2メートルの幅であったことが確認された。おそらく「上の町」を防衛するための城壁として機能していたであろう。さらに、周壁からその内側に向かってステップ状に構築された遺構が検出された(図5)。これらは中期青銅器時代から後期青銅器時代にかけて積み重なるように増築されていった石壁である。また、表土直下で検出された石壁からは「フィブラ」と呼ばれる留め金(図6)が出土しており、その型式から、この地区の上層が鉄器時代Ⅱ期に属することが判明した。



図4 排水溝脇の試掘



← 図5 周壁から連なるステップ状の石壁

↓ 図6 フィブラ



後期青銅器時代と鉄器時代 I 期

(C地区、D地区、E地区)

(1) C地区

テル下段の北側に位置するC地区では、複数の部屋を有する鉄器時代 I 期の建造物が出土していた。今年度も発掘区画が拡張され、南北方向に走る石壁とそれに接続する石壁によって仕切られた部屋が検出された(図7)。部屋の床面は石敷きとなってい

る。また、この部屋の北側に位置するスペースを発掘したところ、3つの大きな石が直立した状態で出土した。このような石柱はハツォールで出土した後期青銅器時代の祭祀施設に類似しており興味深い。また、南北に走る石壁がおそらく後期青銅器時代末期に建てられたもので、それが鉄器時代 I 期にも継続して使用されていたことが明らかになった。このことから、C地区の建造物全体が後期青銅器時代か



図7 C地区 鉄器時代の遺構



図8 D地区 後期青銅器時代～鉄器時代I期の遺構

ら鉄器時代I期にかけて使用されていた可能性を指摘できる。

(2) D地区

D地区はテル上段南斜面の東側に位置し、これまでの調査では、鉄器時代I期の広間(13m×8m)が出土していた。5次調査では、この広間の西側を

発掘した。まず、鉄器時代II期と考えられる2層の石壁が出土し、さらに掘り下げると、複数の小部屋を形成する石壁が出土した(図8)。小部屋の石壁は1.5メートルほどの高さまで残っており、床面からは後期青銅器時代後半の土器が検出された。これによって、建造物が後期青銅器時代に遡ることが明らかになった。

建物全体が後期青銅器時代後半に建てられ、鉄器時代I期になって東側が改装され、中央に2本の柱が立つ広間となったようだ。この広間はオリーブ油生産等に使用された後に、おそらく前11世紀後半に破壊され焼失している。このようにD地区の建築遺構は、後期青銅器時代から鉄器時代I期にかけての居住の継続性を示している。

(3) E地区

テル・レヘシュではこれまでに4基のオリーブ油生産施設と考えられる遺構が出土しており、後期青銅器時代から鉄器時代I期にオリーブ油生産が盛んであったことが指摘されている。5次調査でもテル下段南端にあるE地区で、オリーブ油生産に用いられたと考えられる円形遺構が発掘された(図9)。同遺



図9 オリーブ油生産施設(手前が5次調査検出の遺構)

構の時期は鉄器時代Ⅰ期と考えられる。遺構の直径は1.5メートルほどで、内部からは大きな石（重石？）とオリーブの種が検出された。

鉄器時代Ⅱ期（F地区）

テル頂上の平坦部は鉄器時代Ⅱ期に方形の周壁が築かれ、砦として利用されていたと考えられている。この建造物の性格と年代をさらに検討する目的で、昨年度に引き続き周壁内の発掘を行った。発掘区画を拡張

し、昨年度に検出した東西方向に延びる2列の石壁（幅1.1メートル）の延長を確認することができた（図10）。北側の石壁には幅1.5メートルほどの入口があり、石敷きの床面が続いている。出土土器から判断すると、この建造物の年代は鉄器時代Ⅱ期の後半に比定される。また、石壁に接するように据え付けられている石槽を調査したところ、鉄器時代Ⅱ期に典型的なオリーブの実の破碎に用いる石槽と類似していることが明らかになった。この石槽は出土状



図10 鉄器時代Ⅱ期後半の建造物

況から、石壁と同時期と考えられる。

ローマ時代（G地区）

テルの最頂部ではローマ時代と目される建造物の遺構が露出している。この遺構の年代および性格を検討するために、その1カ所で発掘を行った（図11）。その結果、この遺構がローマ時代初期（紀元後1世紀）の建造物であることが明確となった。地表に露出したこの建造物の平面プランは、ローマ時



図11 初期ローマ時代遺構



図 12 オリント式石臼

代初期に典型的な「ファーム・ハウス」と呼ばれる建造物に類似する。また、発掘調査からは石臼（図12）や磨り石が目立って出土した印象を受ける。こうした痕跡はヘレニズム時代には人が住んでいなかったテル・レヘシュに、ローマ時代になって農業に従事する小規模集団が入植したことを示唆している。

おわりに

第5次調査までの発掘成果をもとに、テル・レヘシュの居住史を概観すると次のようになる（右上の表参照）。前期青銅器時代Ⅱ期に形成された最初の居住地は、前期青銅器時代Ⅲ期にかけて数回にわたって再建されたようである。

その後、青銅器時代中間期の断絶を挟み、周壁を備えた居住地が中期青銅器時代Ⅱ期に再建されると、テル・レヘシュは下ガリラヤ東部の中心的な都市へと発展を遂げた。テル・レヘシュでは後期青銅器時代から鉄器時代Ⅰ期にかけて、居住の継続性が認められ、町が繁栄していた様子がうかがえる。同様の現象はテル・エン・ツイッポリ（Tel'En Zippori）やテル・インアム（Tel Yin'am）といった周辺の村落遺跡においても共通して見受けられるものであり、下ガリラヤ東部の地域性を考える上で興味深い。同地域を支配していた都市国家アナハラト

との関連も今後の研究テーマであろう。

鉄器時代Ⅱ期のテル・レヘシュは、テルの頂上周辺を中心とする小規模な居住地となった。鉄器時代Ⅰ期までは都市が栄えていた下ガリラヤ東部であるが、鉄器時代Ⅱ期になると、凋落に転化したようである。一方、ガリラヤ湖周辺に目を向けると、ベトサイダ（Bethsaida）やエン・ゲヴ（En Gev）といった新興都市が台頭している。この対照的な現象はイスラエル王国成立を背景とした何らかの政治的状況を反映しているのかもしれない。その後、テル・レヘシュには鉄器時代Ⅱ期後半に要塞状の建物が建設され、一時は通商上の拠点となっていたようだ。小規模な居住はペルシア時代まで続いたと考えられるが、ヘレニズム時代には完全に居住が途絶えている。

その後、初期ローマ時代に小集団が入植し、テル頂上に居住地を営んだ。この集団は、第1次ユダヤ戦争を背景に、何らかの理由で移住してきたものと推測される。これがテル・レヘシュにおける最後の居住となった。

	断絶	
Rom.	小規模居住地	ファーム・ハウスが建てられる
Hell.	断絶	
Per.	小規模居住地	
IA IIc	?	要塞が建設される（時期は？）
IA IIb	?	
IA IIa	小規模居住地	
IA I	下ガリラヤ東部の中心都市として発展	居住面積が最大に
LB II		オリーブ油生産が盛んに
LB I		アナハラト？
MB II		「上の町」の周壁建設
	断絶	
EB III	性格不明	最初の居住層
EB II		

参考文献

桑原久男「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2007 年（第 2 次・第 3 次）発掘調査」『第 15 回西アジア発掘調査報告会報告集』（日本西アジア考古学会編）2008 年、97-102 頁。

巽善信「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡第 3・4 次調査」『天理参考館報』第 22 号、2009 年、41-50 頁。

長谷川修一・月本昭男「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2008 年（第 4 次）発掘調査」『第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』（日本西アジア考古学会編）2009 年、86-90 頁。

日野宏「イスラエル国、テル・レヘシュ遺跡第 1・2 次調査」『天理参考館報』第 20 号、2007 年、35

-44 頁。

山内紀嗣「オリーブ油の町 テル・レヘシュ」『古代オリエントの都市遺跡——日本調査隊の活躍——』（日本西アジア考古学会・天理参考館共催公開セミナー要旨集）2009 年、1-6 頁。

Dessel, J. P., Tell 'Ein Zippori and Lower Galilee in the Late Bronze and Iron Ages: A Village Perspective, in Meyers E. M. ed., *In Galilee Through the Centuries: Confluence of Cultures*, Winoa Lake, 1999, pp. 1-32.

Paz, Y. and Kuwabara, H., The First Season of Excavation at Tel Rekhes: The Preliminary Stage (15-27th March 2006)", *Orient Express* 2007/1-2, 17-25.

（筑波大学大学院博士課程）



ウシシュキン教授の来日とその後

小野塚 拓造

テル・アヴィヴ大学考古学研究所のダヴィド・ウシシュキン名誉教授が5月9日に来日され、約2週間日本に滞在された。ウシシュキン先生はエルサレムのシルワン村の鉄器時代墓の調査や、ラキシユ、テル・イズレエルといったイスラエル国内の重要な遺跡の発掘調査で知られる考古学者である。現在は、I・フィンケルシュタイン教授とともに、メギドの発掘プロジェクトを指揮されている。また一緒に来日されたりリイ・ジンガー・アヴィッツ博士は鉄器時代の土器に関するスペシャリストであり、日本隊が調査を続けているエン・ゲヴやテル・レヘシュに関連する重要な論文を何本も発表されている考古学者である。これ

は私事であるが、学部生の頃、初めて読んだ西アジア・地中海考古学の専門書がウシシュキン先生の





テル・レヘシュを訪れるウシシュキン教授一行

The Conquest of Lachish by Sennacherib と、トゥルー
ド・ドタン先生の *The Philistines and Their Material
Culture* であった。私はこの2冊によって南レヴァ
ント考古学にはまってしまったといっても過言では
ない。以来、この2人の先生は私の憧れであったが、
ウシシュキン先生にはお目にかかる機会がないまま
でいた。そんな個人的な思いもあり、今回、立教大
学と天理大学で講演会が開催されたことは、私にと
っては大きな喜びであった。この短報では、先生の
来日と講演会について、簡単ではあるがご紹介した
い。

まず、5月10日に立教大学で『聖書時代のエル
サレム』というタイトルで講演会が行われた。青銅
器時代から鉄器時代にかけてのエルサレムの歴史
を、考古資料から概観する内容である。当日は100
人近い聴衆が集まり、講演会は盛況であった。豊富
なスライドと長谷川修一さんによる的確な通訳によ
って、参加者は、エルサレムの町の成り立ちやソロ
モンが建設した神殿についての具体的なイメージを
持つことができたのではないだろうか。

5月24日には天理大学で『地中海東岸地域の都
市遺跡』というタイトルの講演会が開催された。こ
こではウシシュキン先生に、メギドの発掘調査史と
後期青銅器時代（VII層）の終焉に関して、たくさ

んの興味深いスライドを交えながらお話し
ていただいた。次に、小野塚がテル・レヘ
シュの発掘成果をもとに、下ガリラヤ地方
におけるカナン都市の発達と、鉄器時代II
期における凋落について発表した。天理大
学での講演会は、やや専門的な内容となっ
たと思うが、興味深い議論が交された。ウ
シシュキン先生らはテル・レヘシュから既
に重要な発掘成果が出ていることに驚か
れ、今後さらに素晴らしい調査成果が出
ることを確信できるとのコメントをいただ
いた。立教大学と天理大学のほか、同志社大
学においても講演会が開催されたとうかが
っている。

日本隊に参加しているイツハク・バズさんによ
れば、ウシシュキン先生は以前から日本を訪れるこ
とを望んでおられたようだ。東京、箱根、高山、広島
、京都、奈良、大阪と精力的に観光され、念願の日本
滞在を満喫しているといったご様子であった。また、
2回の講演会はウシシュキン先生、ジンガー・アヴ
イツさんとイスラエル考古学研究会のメンバーと
の交流の出発点となった。お二人は8月8日に、テ
ル・アヴィヴ大学考古学研究所のエステル・ヤディ
ンさんとともに、テル・レヘシュの発掘現場に足を
運んでくださった。ウシシュキン先生は「日本隊の
みなさんにメギドを案内したい」と何度もおっしゃ
っておられた。残念ながら日程の都合がつかず、メ
ギド訪問は実現できなかったが、先生は代わりに日
本隊をテル・アヴィヴ市内のレストランに招待して
くださり、豪快にご馳走してくださった。末筆にな
るが、ウシシュキン先生は、故モシェ・コハヴィ先
生がそうであったように、若い学生たちを励ますこ
とを忘れなかった。講演会や東京観光のお手伝いし
ていただいた立教大学・慶應義塾大学・天理大学の
学生さんたちにとっても貴重な刺激になったのでは
ないだろうか。

(筑波大学大学院博士課程)

エン・ゲヴ出土のヘレニズム土器（1）

口縁部が内湾する小鉢 small deep bowl with incurved rim

牧野久実

典型的な土器の1つ

エン・ゲヴ調査に携わってはや20年と少し、ようやく英文報告書の原稿をまとめつつある今日この頃である。そこで、この場をお借りして、これまで担当してきたヘレニズム時代の土器について素朴な疑問点などを含めつつ紹介していきたい。

発掘調査に参加したことがある方々は時々オイノコイ、ラギノスといった奇妙なヘレニズム時代の土器の名前に困惑されたことがあるかもしれない。もの名前には一般名称とローカルな名称の2通りがある。一般名称は部外者が用途などを想定してつけるもので、これに対しローカルな名称は使い手が用途を熟知したうえでつける。ヘレニズム時代の土器の場合、文献や絵図から名前と用途、形状がわかるものが含まれる。オイノコイやラギノスは古典時代のギリシャ世界の使い手が認識していたローカルな名前なのである。これに対し、鉢 (bowl)、水差し (jug)、壺 (jar) などは部外者である考古学者が用途などを想定して使う呼び名、つまり一般名称である。

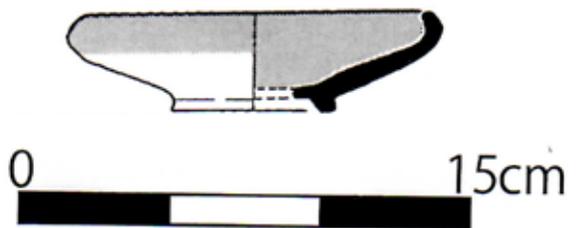
今回ご紹介する小鉢 (small bowl) もそうした一般名称で呼ばれる土器である。特に口縁部が内湾する小型の深鉢 (small deep bowl with incurved rim) はエン・ゲヴ遺跡に参加したことのある方々がもっとも頻繁に目にしたことのある土器ではないだろうか (右図)。出土したものの大半は断片だが、それでも湾曲した口縁部を見つけるたびに「またか」と思った方も少なくないだろう。

内湾する口縁部を持つ小鉢はヘレニズム時代のパレスチナで最も一般的な日常容器の1つである。高さ4~5cm、口径12~13cm、底部の直径は口径のおよそ3分の1で約4~5cmであ

る。胴部の断面は曲線を描くタイプとV字状を描くタイプがある。底部は通常リング状で、V字型のものは平底の場合もある。胎土は鈍いオレンジ色から明るく黄色みがかかったオレンジ色で、表面には灰色がかかった黄土色から暗い赤茶色の塗料がかかる。色合いは均一ではなく、大雑把にまるで塗料を適当にふりかけたようにむらがあるため、Berlin はスプッターペイントと呼んでいる (Berlin 1997, 7)。轆轤で成形し焼成は固い。

この小鉢はテル・ドルでは紀元前4世紀半ばから出現し始める。そしてヘレニズム時代の初めには出土する碗の75%がこのタイプである (Guz-Zilberstein 1995, 289)。テル・ミハルでもD地区のVI層から出土しておりコインや共存する土器から紀元前4世紀末以後の出現とされている (Singer-Avitz 1989, 132)。テル・シクモナでも紀元前4世紀後半とされるB層で出土している (Elgavish 1972)。パレスチナに限らずヘレニズム世界に広く出現し、紀元前2世紀末になると次第に見られなくなり、紀元前1世紀では稀となる。

アテネでこのタイプがほとんど見られないことから、恐らく生産地は東地中海世界のどこかにあったのではないかと多くの研究者が考えている。実際 Gunneweg らは胎土分析によってキプロス東部が産地で紀元前220年から紀元前100年にかけて



作られたという結果を得ている (Gunneweg et al 1983)。また、Jones はアナトリア南東部のタルサスからの出土例から、前期のものはより深く中期になるとより浅く小さくなり口縁部の内湾する角度もよりシャープになることを指摘したが (Jones 1950)、Fisher も同様にテル・ミハルにおける出土状況から前期の曲線タイプが後期のV字状タイプへと変化したことを指摘している (Fisher 1989)。

本当に食器なのか？

この小鉢の機能について特にこれまで論じた研究は無い。いくつかの報告書を見ても、当たり前のように食器として扱われ、しかも用途多様な使い勝手の良い食器と考えられているようだ。

例えば、地中海沿岸部のテル・ドルでは出土土器を食器、料理用具、貯蔵用具、その他と大きく分け、食器の筆頭に小鉢を記載している。ガリラヤ湖北部にあるテル・アナファでは、食器、調理用具、その他の装飾土器と大きく分け、テーブルアンフォラ、ラギノス、テーブル用水差し、テーブル用冷水差し、アンフォリスコス、アンゲンタリウム、ミニチュアと小瓶、小鉢、蓋と、食器の最後から2番目に記載している。いずれにおいても食卓で用いる食器として位置づけられているようである。また、アレクサンダー大王がインドに遠征した際、エーゲ海のイカリア島に形が似ていることからイカリア (Icaria) と名付けて植民したペルシャ湾のファイラカ島でも多数が出土しており発掘報告書に “Its popularity must have been due to its handiness and its being fit for many purposes of daily life.” とある。(Hannestad 1983, 15 & vol. 2.2 plate 1)。さらにこの小鉢をエキヌス・ボール (“echinus” bowls) 「雲丹」の形をした鉢と呼ぶこともある。

ところが、主婦目線、つまり食器を使う、もしくは人に使ってもらう立場でこの土器を眺めると、ある疑問がわき上がってくる。確かに一見すると何にでも使える食器に思える。特に日本人にとっては大きさといい形といい、また底部とのバランスといい、

ご飯をよそうお茶碗にそっくりである。しかし、違和感があるのはその口縁部である。内湾する口縁部は食器として使い勝手が悪い。口を直接つける場合も道具を使って小鉢の中のものを取る場合も、口縁部は外反していないと使いにくい。皆さんも一度家にある食器類を眺めてみてほしい。口縁部が内湾する食器が1つでもあるだろうか？食器のほとんどの口縁部が垂直に立ち上がる、もしくは外反しているのではないだろうか。我が家には内湾しているものは1点もなく、近所で和洋食器を扱う専門店で探してみたが、やはり見当たらなかった。唯一コーヒーマルク用の壺の口縁部は内湾しているが、一部に注ぎ口がついていた。つまり一般的に内湾する口縁部を持つ容器は中身を出すためというよりも中身をこぼさないためのものといえる。

直接器に口をつけて使う場合もテーブルなどに置いて用いる場合も、容器の中身を頻繁に出し入れする場合には口縁部が外反しているほうが使い勝手が良い。他方、口縁部が内湾する器では中身を出し入れする際に口縁部が邪魔になる。その一方で、食器の中身が外へ逃げないように構造にしたい場合には内湾する口縁部のほうが適している。

ちなみにヘレニズム時代には同じ大きさの小鉢でも外反するタイプも存在し、エン・ゲヴでも出土例が見られる。口縁部が外反する鉢はアティック様式のものとして紀元前5世紀末から見られるようになり紀元前4世紀でアテネや東地中海世界で広く見られるようになる。紀元前3世紀初めでもまだ存在し、原型のアティック様式のような黒色のつやのある釉薬が施される。

ドルの出土例によると (Guz-Zilberstein, 291) 前期のものは胴部が丸みを帯びて口縁部が外反するタイプで、原型のアティック様式に近い形態である (rounded outcurved)。これらは紀元前4世紀後半から紀元前3世紀前半に見られる。後期、すなわち紀元前3世紀の初めになると外反する口縁部を持ち胴部に屈曲部があるタイプが見られるようになる (carinated outturned rim bowl)。これらは初めは

つやのある黒色の釉薬がかけられるがヘレニズム時代の後半になると暗赤色やオレンジがかった赤の釉薬に色彩が変化するようになる。紀元前2世紀には同様のタイプでも口縁部がより強く外側へ張り出すようになる。口径に対する底部の直径の割合は口縁部が内湾するタイプよりも大きく、食卓に置いて用いても容易に倒れる心配はなかつただろう。いずれにせよ、口縁部が外反する小鉢が食器として用いられたことは容易に想像できるが、内湾する小鉢については疑いが生じる。

別の用途の可能性

口縁部が内湾する小鉢は本当に食器なのだろうか、という疑問について少し調べてみることにした。すると別の解釈も可能であることがわかってきた。

下エジプトのテル・アトリブでは浴槽の遺構が見つかっており、そこから紀元前3世紀～紀元前2世紀の沐浴する妊婦の姿を表現した土偶が見つまっている。報告者によると (Myśliwiec 2007) その妊婦は卵型の浴槽に座り “... and pouring water over herself from a bowl with incurved rim.” つまり、口縁部が内湾する小鉢で水を汲み上げ身体にかけているというのである。Myśliwiecはこの浴槽が身体を清めると同時に豊穡や生命の誕生にまつわる儀礼に関係するものと考えている。この報告には土偶の写真が掲載されているが、残念ながらことに小鉢の部分は映っていない。しかし、小型で片手に持ちやすく、また口縁部が内湾していることで中の液体がこぼれにくいことを考えると、口縁部が内湾した小鉢が水を汲み上げるといった目的に適した形状なのではないかと想像できる。この土偶に表現された鉢がどのようなものなのかを今後ぜひ確かめたい。

文献にも手や足をすすぐときに小鉢が使われていたことを示す記述がある。以下は紀元2～3世紀の人といわれるアテナイオスが記した『食卓の賢人たち』からの抜粋である (柳沼重剛氏の訳を使わせていただいた)。この書は古典ギリシャ～ヘレニズム～ローマ時代の料理や食材などについて列席した賢

人達が次々に蓋蓄を傾けて知識を披露するという内容で、全15巻に及ぶ。

手や足をすすいで汚れた水 (アポニプトロン) のことをアポニンマといった。アリストパネスに、「まるで夕方に、足すぎの水をかけるときみたいに」とあるが、たぶん、この水を入れる鉢のこともそう呼んだのだろうな、手にかける水もその鉢もケイロニプトロンといていたのだからね。しかしアテナイでは、アポニンマは特別な意味で使われていたようで、つまり死者のための葬礼で使う水とか、不浄を浄める水とか、そういうのだ。(第9巻 465頁)

残念ながら挿絵が無いためにケイロニプトロンがどのような鉢であったのかはわからない。しかし、こうした際に使用された鉢が片手で持ちやすい形態であったことは想像できる。

別の箇所では手すぎの水の器のことをケルニボンと呼び、水差しとセットで使うことが示されている。

すると誰かが『イリアス』を引いてこう言った。「こう言って老王が女中頭にきれいな水を手に注げと命ずると、女中はケルニボンと水差しを持って傍らに立った。

さらに、御祓いで使用する場面についても言及している。

またエウボリスは『山羊』で、「手水 (cherniba) はそのまま止めておけ。」(……) この水というのは、犠牲を捧げた祭壇から下ろした燃えた薪を浸した水だ。これを参会者一同に御祓いとしてふりかける。

本稿で紹介した小鉢はケルニボンというローカルな名前と呼ばれていたのだろうか。それを証明する

にはヘレニズム世界における今後の調査によって新たな証拠が必要であろう。

(鎌倉女子大学教育学部教育学科・准教授)

アテナイオス

1997 『食卓の賢人たち』柳沼重剛訳 京都大学学術出版会

Berlin, A. M.

1997 “The Plain Wares,” in S. C. Herbert (ed.), *Tel Anafa II, i.*, Kelsey Museum of the University of Michigan, ix-246.

Elgavish, J.

1972 *The Excavations of Shikmona: A Selection Garrison Camp from Hasmonean Times*. Haifa.

Fisher, M.

1989 “Hellenistic Pottery (Strata V-III),” in Z. Herzog, G. Rapp, Jr, and Negbi, O. (eds.), *Excavations at Tel Michal*, Israel, Tel Aviv, 177-187.

Gunneweg, J., et al

1983 *The Provenience, Typology and Chronology of Eastern Terra Sigillata*, (Qedem 17), Jerusalem.

Guz-Zilberstein, B.

1995 “The Typology of the Hellenistic Coarse Ware and Selected Loci of the Hellenistic and Roman Periods,” in E. Stern et al (eds.), *The Excavations at Dor, Final Report Volume IB. Areas A and C: The Finds*. Qedem Reports, The Institute of Archaeology, The Hebrew University of Jerusalem in cooperation with The Israel Exploration Society, 289-290.

Hannestad, L.

1983 *The Hellenistic Pottery from Failaka*, Jutland Archaeological Society Publications.

Jones, F. F.

1950 “The Pottery,” in H. Goldman (ed.), *Excavations at Gozlu Kule, Tarsus, I: The Hellenistic and*

Roman Periods, Princeton, 149-296.

Myśliwiec, K.

2007 “ksiązka Tell Atrib:Layout 1” 135-144. (Online Publication: http://www.siwaiwa.pl/cas/book/book70_12.pdf#search='ksiązka Tell Atrib')

Singer-Avitz, L.

1989 “Local Pottery of the Persian Period (Strata XI-VI),” in Z. Herzog, G. Rapp, Jr., and Negbi, O. (eds.), *Excavations at Tel Michal, Israel*, Tel Aviv, 115-44.

□ 第13回イスラエル考古学研究会・報告 □

2010年7月3日(土) 13:30～

於:立教大学池袋キャンパス7号館7202教室

規約の改正に関する審議

◇ 発表 ◇

高井啓介

イスラエルの民間信仰と考古学～「エンドルの
霊媒の女」をめぐる～

津本英利

シリアの後期鉄器時代・アケメネス朝時代～テ
ル・マストゥーマの事例を中心に～

〈エン・ゲヴ英文報告書作成と関連して〉

桑原久男 「エン・ゲヴの遺構について」

長谷川修一 「エン・ゲヴ出土のアンフォラの年代
について」

小野塚拓造 「エン・ゲヴ出土の石製品について」

牧野久実 「続 エン・ゲヴのペルシャ～ヘレニ
ズム時代の考え方」

* * * * *

上記の通り、第13回研究会で規約の変更が承認され
ました。改訂後の規約全文を以下に掲載します。
改訂部分に下線を附しました。

イスラエル考古学研究会規約

2004年10月25日 制定

2010年7月3日 改訂

第1条 名称

この研究会は「イスラエル考古学研究会」(以下「本研究会」)という。

第2条 事務局

本研究会の事務局は立教大学文学部月本研究室 (豊島区西池袋3-34-1)におく。

第3条 目的

本研究会はイスラエルおよびその周辺地域の歴史・文化・宗教に関する考古学を中心とした研究成果の発表および研究調査を行うことを目的とする。

第4条 事業

上の目的を果たすために以下の事業を行う。

- イ. 研究発表会の開催
- ロ. ニュースレターの発行
- ハ. イスラエルおよびその周辺地域の調査研究
- ニ. その他

第5条 会員

本研究会の会員は上記の趣旨に賛同する者とする。

第6条 会費

会費は細則に定めるものとする。

第7条 役員

本研究会は会長、副会長、役員7名(正副会長を含む)をおく。正副会長並びに役員は任期を3年とし、役員は一般会員の互選、会長は役員による

互選とする。但、重任は妨げない。

第8条 会計

本研究会の会計は事務局が行う。

第9条

本規約の改定は役員会で発議し、会員の承認を得るものとする。

会費に関する細則

一、会費は当面の間、無料とし、研究会への参加費を500円とする。

編集後記

○尋常な暑さではなかった今年の日本の夏。この暑さはイスラエルの夏以上だったかも……などと薄れつつある滞在時の記憶を辿りながら、団扇をばたつかせて夏をやり過ごしました。去年につづいてエン・ゲヴ、レヘシュ両遺跡で発掘調査は行われましたが、今号はその報告ではなく、昨年の報告です。発行の遅れについてはただただお詫びを申し上げるばかり。この夏の報告は11号、12号に掲載予定です。○今年度から事務局が天理大学から立教大学に移り、担当も鎌倉女子大学の牧野久実氏に代りました。前任の巽善信氏には編集過程でさまざまにご面倒をおかけいたしました。このニュースレターが10号を迎えることができたのも氏とのやり取りがあったればこそ。この場に記して感謝申し上げます。○次号との間隔はやや狭くなりますが、11号を迎えるにあたり、トップページのリニューアルを検討中です。お楽しみに。(Mi.)

●●● 目次 ●●●

第5次テル・レヘシュ発掘調査	小野塚 拓造 1
ウシシュキン教授の来日とその後	小野塚 拓造 7
エン・ゲヴ出土のヘレニズム土器(1)	牧野 久実 9
お知らせ	12
編集後記	13

イスラエル考古学研究会 ニュースレター No. 10

2010年10月28日

編集: 牧野久実 宮崎 修二

発行: イスラエル考古学研究会

〒171-8501

豊島区西池袋3-34-1 立教大学文学部月本研究室

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256 イスラエル考古学研究会